令 和 ７ 年 度

音更町公害対策審議会議案

日　時　　令和７年７月２５日（金）
　　午前１０時００分
場　所　　音更町役場　２階　庁議室

音　　更　　町

会　議　次　第

１　開会

２　委嘱状交付

３　町長挨拶

４　会長及び副会長の選出について

５　会長挨拶

６　議事

（１）令和６年度公害苦情の状況について

（２）令和６年度環境調査の測定結果について

（３）その他

７　閉会

会長及び副会長の選出について

会　長＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

副会長＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（１）令和６年度公害苦情の状況について

令和６年度の公害に関する苦情等の件数は１０件で、最も多かったものは大気汚染４件(40%)、続いて悪臭３件(30%)、騒音２件(20%)、水質汚濁１件(10%)となっている。

１　公害種類別件数

区　分	件数	主な発生源	構成比(%)
大気汚染	4	野焼き（個人2件、事業所1件）、産廃の粉塵	40.0%
水質汚濁	1	灯油漏出	10.0%
土壌汚染	0		0.0%
騒音	2	集合住宅の生活音	20.0%
振動	0		0.0%
地盤沈下	0		0.0%
悪臭	3	薪ストーブ、塗料、堆肥	30.0%
その他	0		0.0%
合計	10		

２　発生源の業種

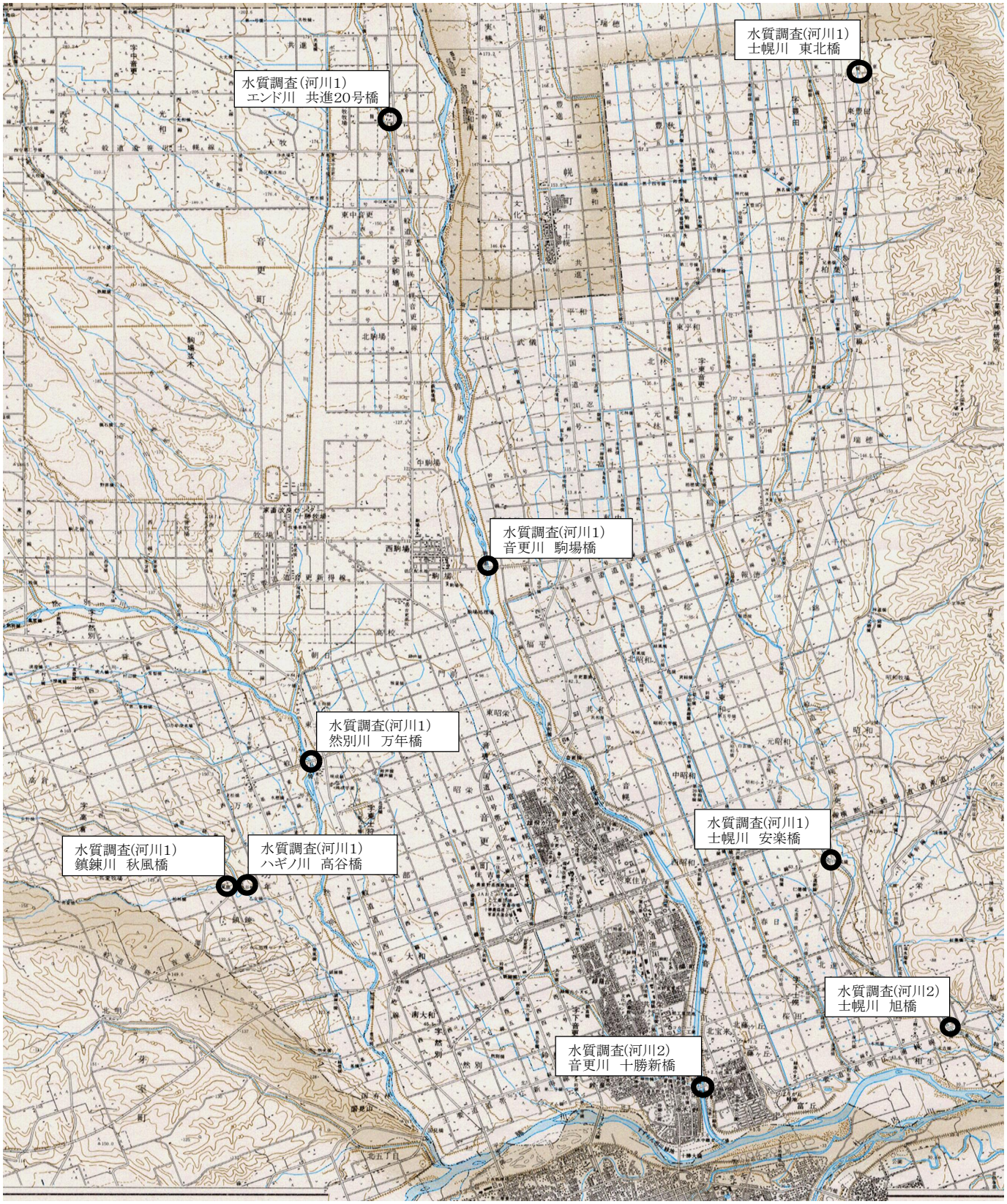
公害種類 / 業種	大気汚染	水質汚濁	土壌汚染	騒音	振動	地盤沈下	悪臭	件数	構成比(%)
農業								0	0.0%
建設業	2							2	20.0%
製造業		1					1	2	20.0%
サービス業								0	0.0%
運輸業								0	0.0%
家庭生活	2			2			2	6	60.0%
原因不明								0	0.0%
計	4	1	0	2	0	0	3	10	100.0%

３　年度別公害苦情件数　　単位：件

区　分	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
大気汚染	7	4	4	2	9	2	1	5	4
水質汚濁	0	3	0	0	0	5	0	0	1
土壌汚染	0	3	0	0	6	3	0	1	0
騒音	1	2	3	3	5	1	9	1	2
振動	0	0	0	1	0	0	0	1	0
地盤沈下	0	0	0	0	0	0	0	0	0
悪臭	1	4	3	4	6	1	4	4	3
その他	0	0	1	0	0	0	0	0	0
合計	9	16	11	10	26	12	14	12	10

（２）令和６年度環境調査の測定結果について

〈令和６年度環境調査測定地点図〉



河川水質調査

町内における公共用水域の水質状況を把握するため、十勝川水系に属する音更川、然別川、士幌川、音更川の支流であるエンド川、然別川の支流である鎮練川、ハギノ川等６河川９地点で年４回の水質調査を実施しました。

このうち、音更川、然別川及び士幌川については、いずれも「生活環境の保全に関する環境基準」において河川Ａ類型に指定されています。また、その他の調査対象河川等については、環境基準は設定されていませんが、それぞれ河川Ａ類型に指定されている河川に合流することから、これと同等以上の水質であることが望ましいと考えられるので、全ての調査対象河川等について環境基準（河川Ａ類型）と比較して評価しています。

令和６年度の水質測定結果については、以下のとおりとなっています。

表１　河川１　水質測定結果（年４回測定平均値）

項目（単位） ＼ 調査地点			エンド川 共進 20号橋	音更川 駒場橋	士幌川 安楽橋	士幌川 東北橋	然別川 万年橋	鎮錬川 秋風橋	ハギノ川 高谷橋	河川 環境基準 (A類型)
分析項目	河川に関する生活環境項目	水素イオン濃度(pH)	7.5	8.1	8.3	8.1	7.9	7.8	8.0	6.5～8.5
		生物化学的酸素要求量(BOD) (mg/L)	0.7	0.6	0.6	0.5	0.9	15.0	0.5	2　以下
		浮遊物質量(SS) (mg/L)	2	4	4	2	12	6	4	25　以下
		溶存酸素量(DO) (mg/L)	12.2	12.8	13.4	12.9	12.5	10.9	12.8	7.5　以上
		大腸菌数※ (CFU/100mL)	92.0	76	140	350	670	39,000	130	300以下
	その他の項目	全窒素 (mg/L)	2.3	1.7	6.0	5.7	2.3	9.5	1.1	－
		全燐 (mg/L)	0.12	0.170	0.056	0.045	0.080	0.660	0.036	－
		硝酸性窒素および亜硝酸性窒素 (mg/L)	2.2	1.7	5.9	5.7	2.1	4.0	0.9	－
		アンモニア性窒素 (mg/L)	0.05	0.05	0.05	0.05	0.12	3.39	0.05	－
類型			－	A	A	A	A	－	－	

表２　河川２　水質測定結果（年４回測定平均値）

項目（単位） ＼ 調査地点			士幌川 旭橋	音更川 十勝新橋
分析項目	水素イオン濃度(pH)		8.0	8.2
	生物化学的酸素要求量(BOD) (mg/L)		0.8	0.8
	大腸菌数※ (CFU/100mL)		340	40
類型			A	A

※令和4年度の調査から、『大腸菌群数(MPN/100mL)』に代わり『大腸菌数(CFU/100mL)』を調査している。
※網掛け部分は、環境基準（類型Ａ）を超過したもの。
※BODは、全データを値の小さいものから順に並べ、0.75×ｎ番目（ｎは全データ数）の値
※大腸菌数は、全データを値の小さいものから順に並べ、0.90×ｎ番目（ｎは全データ数）の値

エンド川（共進２０号橋）

調査地点	エンド川（共進２０号橋）							河川環境基準(A類型)
採水年月日	R6.7.23	R6.9.25	R6.12.9	R7.3.5	平均値(BODは75%値、大腸菌数は90%値)	最小値	最大値	
採水時刻	9:39	10:14	10:53	9:54				
天候	晴れ	曇り	晴れ	曇り				
気温 (℃)	28.7	15.1	1.3	-4.5				
水温 (℃)	14.3	12.4	5.0	3.7				
水素イオン濃度(pH)	7.4	7.5	7.5	7.7	7.5	7.4	7.7	6.5～8.5
生物化学的酸素要求量(BOD) (mg/L)	0.8	0.7	0.5未満	0.7	0.7	0.5未満	0.8	2 以下
浮遊物質量(SS) (mg/L)	2	2	1未満	1未満	2	1未満	2	25 以下
溶存酸素量(DO) (mg/L)	9.7	12.2	12.3	14.5	12.2	9.7	14.5	7.5 以上
大腸菌数※ (CFU/100mL)	59	66	12	92	92	12	92	300以下
全窒素 (mg/L)	2.3	2.2	2.5	2.3	2.3	2.2	2.5	-
全燐 (mg/L)	0.140	0.160	0.087	0.088	0.120	0.087	0.160	-
硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 (mg/L)	2.3	2.2	2.4	2.0	2.2	2.0	2.4	-
アンモニア性窒素 (mg/L)	0.05未満	0.05未満	0.05未満	0.05未満	0.05	0.05未満	0.05未満	-
類型	-							

平成３０年度～令和６年度の平均値

項目（単位） ＼ 調査地点			H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
分析項目	河川に関する生活環境項目	水素イオン濃度(pH)	7.3	7.2	7.3	7.5	7.2	7.6	7.5
		生物化学的酸素要求量(BOD)	1.4	1.4	1.4	3.1	0.7	0.7	0.7
		浮遊物質量(SS) (mg/L)	2	2	2	2	1	1	2
		溶存酸素量(DO) (mg/L)	11.0	10.1	10.8	12.2	11.3	12.4	12.2
		大腸菌数※ (CFU/100mL)	1,300	3,500	9,400	2,500	190	120	92
	その他の項目	全窒素 (mg/L)	3.2	2.6	2.7	2.7	4.1	2.8	2.3
		全燐 (mg/L)	0.16	0.15	0.14	0.15	0.15	0.10	0.12
		硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 (mg/L)	2.4	2.3	2.4	2.4	3.5	2.7	2.2
		アンモニア性窒素 (mg/L)	0.05	0.07	0.20	0.05	0.21	0.05	0.05

※令和3年度までの調査項目は『大腸菌群数(MPN/100mL)』、河川環境基準は1,000以下である。

●測定結果

・pH、BOD、SS、DO及び大腸菌数は、全調査時に環境基準(河川A類型)を満たしている
・DO以外の数値は調査期間中の経時変化が小さく安定している
・DOの数値変動については、水温が高い夏に低く、水温が低い冬に高くなるため、水温に依存したもの

音更川（駒場橋）

調査地点	音更川（駒場橋）							
採水年月日	R6.7.23	R6.9.25	R6.12.9	R7.3.5	平均値（BODは75%値、大腸菌数は90%値）	最小値	最大値	河川環境基準（A類型）
採水時刻	9:15	9:30	10:24	9:30				
天候	晴れ	曇り	晴れ	曇り				
気温 (℃)	29.3	15.8	0.9	-4.8				
水温 (℃)	21.1	13.4	1.4	0.3				
水素イオン濃度(pH)	8.1	8.5	8.0	7.8	8.1	7.8	8.5	6.5～8.5
生物化学的酸素要求量(BOD) (mg/L)	0.9	0.6	0.5未満	0.5未満	0.6	0.5未満	0.9	2 以下
浮遊物質量(SS) (mg/L)	7	3	1未満	3	4	1未満	7	25 以下
溶存酸素量(DO) (mg/L)	9.7	12.2	14.7	14.6	12.8	9.7	14.7	7.5 以上
大腸菌数※ (CFU/100mL)	76	42	5	51	76	5	76	300以下
全窒素 (mg/L)	1.2	1.5	2.0	2.2	1.7	1.2	2.2	-
全燐 (mg/L)	0.110	0.430	0.050	0.100	0.170	0.050	0.430	-
硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 (mg/L)	1.2	1.3	2.0	2.1	1.7	1.2	2.1	-
アンモニア性窒素 (mg/L)	0.05未満	0.05未満	0.05未満	0.05未満	0.05	0.05未満	0.05未満	-
類型	A							

平成３０年度～令和６年度の平均値

項目（単位） ＼ 調査地点			H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
分析項目	河川に関する生活環境項目	水素イオン濃度(pH)	7.9	8.0	7.9	8.4	7.7	8.0	8.1
		生物化学的酸素要求量(BOD)	0.5未満	0.6	0.6	1.0	0.6	0.5未満	0.6
		浮遊物質量(SS) (mg/L)	4	3	3	8	3	3	4
		溶存酸素量(DO) (mg/L)	12.5	12.3	12.7	13.1	12.0	12.2	12.8
		大腸菌数※ (CFU/100mL)	1,100	1,200	600	4,900	760	77	76
	その他の項目	全窒素 (mg/L)	2.7	2.3	2.0	2.4	3.1	2.3	1.7
		全燐 (mg/L)	0.09	0.14	0.14	0.17	0.140	0.120	0.170
		硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 (mg/L)	2.4	2.1	1.9	2.2	2.7	2.1	1.7
		アンモニア性窒素 (mg/L)	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05

※令和3年度までの調査項目は『大腸菌群数(MPN/100mL)』、河川環境基準は1,000以下である。

●測定結果

- pH、BOD、SS、DO及び大腸菌数は、全調査時に環境基準(河川A類型)を満たしている
- BOD、SS、大腸菌数、全窒素、硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素、アンモニア性窒素及び全燐は、調査期間中の経時変化が小さく安定した値であった
- pHは9月に高くなったが、藻類による光合成の影響によるものと思われる
- DOの変動については、エンド川と同様に水温に依存したものと考えられる

士幌川（安楽橋）

調査地点		士幌川（安楽橋）							
採水年月日		R6.7.23	R6.9.25	R6.12.9	R7.3.5	平均値（BODは75%値、大腸菌数は90%値）	最小値	最大値	河川環境基準（A類型）
採水時刻		10:32	11:28	12:00	11:06				
天候		晴れ	曇り	晴れ	曇り				
気温	(℃)	31.8	16.7	2.0	-4.8				
水温	(℃)	24.0	13.6	0.1	-0.4				
水素イオン濃度(pH)		8.4	8.9	7.9	7.8	8.3	7.8	8.9	6.5～8.5
生物化学的酸素要求量(BOD)	(mg/L)	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.5	0.6	2　以下
浮遊物質量(SS)	(mg/L)	3	2	3	8	4	2	8	25　以下
溶存酸素量(DO)	(mg/L)	10.1	13.1	15.4	14.9	13.4	10.1	15.4	7.5　以上
大腸菌数※	(CFU/100mL)	140	16	8	2	140	2	140	300以下
全窒素	(mg/L)	5.7	5.9	6.6	5.9	6.0	5.7	6.6	-
全燐	(mg/L)	0.062	0.063	0.037	0.061	0.056	0.037	0.063	-
硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素	(mg/L)	5.7	5.9	6.6	5.5	5.9	5.5	6.6	-
アンモニア性窒素	(mg/L)	0.05未満	0.05未満	0.05未満	0.05未満	0.05	0.05未満	0.05未満	-
類型		A							

平成３０年度～令和６年度の平均値

項目（単位） ＼ 調査地点			H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
分析項目	河川に関する生活環境項目	水素イオン濃度(pH)	7.7	7.7	7.8	7.7	7.5	7.8	8.3
		生物化学的酸素要求量(BOD)	0.7	0.5未満	0.5未満	0.7	0.6	0.5	0.6
		浮遊物質量(SS) (mg/L)	6	4	3	6	7	5	4
		溶存酸素量(DO) (mg/L)	12.4	12.2	12.3	11.8	11.9	11.8	13.4
		大腸菌数※ (CFU/100mL)	690	460	1,400	1,400	660	340	140
	その他の項目	全窒素 (mg/L)	9.0	6.9	6.4	7.9	10.0	7.6	6.0
		全燐 (mg/L)	0.05	0.054	0.054	0.062	0.100	0.053	0.056
		硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 (mg/L)	8.6	6.8	6.4	7.8	9.2	7.5	5.9
		アンモニア性窒素 (mg/L)	0.06	0.05未満	0.05	0.05	0.16	0.05	0.05

※令和3年度までの調査項目は『大腸菌群数(MPN/100mL)』、河川環境基準は1,000以下である。

●測定結果

- BOD、SS及びDO及び大腸菌数は、全調査時に環境基準(河川A類型)を満たしている
- pH及びDO以外の数値は調査期間中の変化が小さく安定している
- pHは9月に高くなったが、藻類による光合成の影響によるものと思われる
- DOの変動については、他地点と同様に水温に依存したものと考えられる
- 全窒素、硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素が他地点より高値であるが、農用地に蓄積された窒素成分が恒常的に供給されるためと考えられる

士幌川（東北橋）

調査地点	士幌川（東北橋）							
採水年月日	R6.7.23	R6.9.25	R6.12.9	R7.3.5	平均値（BODは75%値、大腸菌数は90%値）	最小値	最大値	河川環境基準（A類型）
採水時刻	10:04	10:50	11:27	10:37				
天候	晴れ	曇り	晴れ	曇り				
気温 (℃)	29.3	19.1	1.2	-5.3				
水温 (℃)	18.2	14.4	2.2	0.8				
水素イオン濃度(pH)	8.0	8.5	7.9	7.9	8.1	7.9	8.5	6.5～8.5
生物化学的酸素要求量(BOD) (mg/L)	0.5	0.9	0.5未満	0.5未満	0.5	0.5未満	0.9	2 以下
浮遊物質量(SS) (mg/L)	2	2	1未満	1未満	2	1未満	2	25 以下
溶存酸素量(DO) (mg/L)	10.0	12.6	14.1	14.8	12.9	10.0	14.8	7.5 以上
大腸菌数※ (CFU/100mL)	350	62	12	8	350	8	350	300以下
全窒素 (mg/L)	5.6	5.5	5.9	5.9	5.7	5.5	5.9	-
全燐 (mg/L)	0.053	0.062	0.033	0.030	0.045	0.030	0.062	-
硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 (mg/L)	5.6	5.5	5.9	5.6	5.7	5.5	5.9	-
アンモニア性窒素 (mg/L)	0.05未満	0.05未満	0.05未満	0.05未満	0.05	0.05未満	0.05未満	-
類型	-							

平成３０年度～令和６年度の平均値

項目（単位） ＼ 調査地点			H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
分析項目	河川に関する生活環境項目	水素イオン濃度(pH)	8.0	7.7	7.8	7.9	7.6	7.9	8.1
		生物化学的酸素要求量(BOD)	0.9	0.5	0.7	0.6	0.9	0.5未満	0.5
		浮遊物質量(SS) (mg/L)	2	2	2	2	4	2	2
		溶存酸素量(DO) (mg/L)	12.7	11.8	12.0	12.1	11.4	12.0	12.9
		大腸菌数※ (CFU/100mL)	1,000	10,000	12,000	2,100	570	270	350
	その他の項目	全窒素 (mg/L)	6.8	5.7	5.4	6.2	7.8	6.2	5.7
		全燐 (mg/L)	0.05	0.094	0.067	0.049	0.090	0.056	0.045
		硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 (mg/L)	6.2	5.4	5.4	6.2	7.4	6.2	5.7
		アンモニア性窒素 (mg/L)	0.05	0.05未満	0.05	0.05	0.08	0.05	0.05

※令和3年度までの調査項目は『大腸菌群数(MPN/100mL)』、河川環境基準は1,000以下である。

●測定結果

- pH、BOD、SS及びDOは、全調査時に環境基準(河川A類型)を満たしている
- pH、DO及び大腸菌数以外の数値は調査期間中の変化が小さく安定している
- pHは9月に高くなったが、藻類による光合成の影響によるものと思われる
- DOの変動については、他地点と同様に水温に依存したものと考えられる
- 大腸菌数は7月に基準を超過したが、水温上昇による菌の活発化が原因として考えられる
- 全窒素、硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素が他地点より高値であるが、農用地に蓄積された窒素成分が恒常的に供給されるためと考えられる

然別川（万年橋）

調査地点	然別川（万年橋）							
採水年月日	R6.7.23	R6.9.25	R6.12.9	R7.3.5	平均値（BODは75%値、大腸菌数は90%値）	最小値	最大値	河川環境基準（A類型）
採水時刻	8:50	9:06	9:46	9:08				
天候	晴れ	曇り	晴れ	曇り				
気温 (℃)	30.6	16.1	-0.1	-2.1				
水温 (℃)	22.2	11.6	-0.3	-0.4				
水素イオン濃度(pH)	8.0	7.9	7.7	7.8	7.9	7.7	8.0	6.5～8.5
生物化学的酸素要求量(BOD) (mg/L)	1.0	0.7	0.9	0.7	0.9	0.7	1.0	2 以下
浮遊物質量(SS) (mg/L)	6	4	20	18	12	4	20	25 以下
溶存酸素量(DO) (mg/L)	9.4	11.3	14.5	14.7	12.5	9.4	14.7	7.5 以上
大腸菌数※ (CFU/100mL)	150	68	300	**670**	**670**	68	**670**	300以下
全窒素 (mg/L)	2.0	1.7	2.1	3.5	2.3	1.7	3.5	-
全燐 (mg/L)	0.110	0.049	0.060	0.100	0.080	0.049	0.110	-
硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 (mg/L)	1.9	1.7	1.8	2.8	2.1	1.7	2.8	-
アンモニア性窒素 (mg/L)	0.05未満	0.05未満	0.18	0.21	0.12	0.05未満	0.18	-
類型	A							

平成３０年度～令和６年度の平均値

項目（単位） ＼ 調査地点			H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
分析項目	河川に関する生活環境項目	水素イオン濃度(pH)	7.7	7.8	7.7	7.9	7.6	8.0	7.9
		生物化学的酸素要求量(BOD)	0.5未満	0.5未満	0.5未満	0.6	0.6	0.8	0.9
		浮遊物質量(SS) (mg/L)	14	10	6	4	13	5	12
		溶存酸素量(DO) (mg/L)	12.3	12.3	12.4	12.6	11.8	12.4	12.5
		大腸菌数※ (CFU/100mL)	450	900	650	820	170	120	**670**
	その他の項目	全窒素 (mg/L)	3.6	2.7	2.3	3.2	3.9	2.8	2.3
		全燐 (mg/L)	0.06	0.053	0.049	0.046	0.073	0.040	0.080
		硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 (mg/L)	3.3	2.4	2.0	3.0	3.5	2.7	2.1
		アンモニア性窒素 (mg/L)	0.14	0.08	0.10	0.09	0.17	0.05	0.12

※令和3年度までの調査項目は『大腸菌群数(MPN/100mL)』、河川環境基準は1,000以下である。

●測定結果

- pH、BOD、SS及びDOは、全調査時に環境基準(河川A類型)を満たしている
- DOの変動については、他地点と同様に水温に依存したものと考えられる
- 大腸菌数は12月に基準値と同値に、3月には基準値を超過したが、SSも同時期に高くなったことから、融雪の影響による汚濁物質の流入が一因と考えられる

鎮錬川（秋風橋）

調査地点	鎮錬川（秋風橋）							
採水年月日	R6.7.23	R6.9.25	R6.12.9	R7.3.5	平均値（BODは75%値、大腸菌数は90%値）	最小値	最大値	河川環境基準（A類型）
採水時刻	8:16	8:17	8:39	8:29				
天候	晴れ	曇り	晴れ	曇り				
気温 (℃)	26.4	17.2	-0.4	-2.0				
水温 (℃)	21.6	12.6	-0.4	-0.4				
水素イオン濃度(pH)	7.7	7.8	7.8	7.7	7.8	7.7	7.8	6.5～8.5
生物化学的酸素要求量(BOD) (mg/L)	21.0	15.0	2.6	6.2	15.0	2.6	21.0	2 以下
浮遊物質量(SS) (mg/L)	5	3	4	13	6	3	13	25 以下
溶存酸素量(DO) (mg/L)	6.8	9.6	13.8	13.2	10.9	6.8	13.8	7.5 以上
大腸菌数※ (CFU/100mL)	920	3,200	780	39,000	39,000	780	39,000	300以下
全窒素 (mg/L)	13.0	16.0	5.3	3.7	9.5	3.7	16.0	-
全燐 (mg/L)	1.100	0.600	0.210	0.710	0.660	0.210	1.100	-
硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 (mg/L)	5.5	6.4	2.3	1.6	4.0	1.6	6.4	-
アンモニア性窒素 (mg/L)	4.10	6.70	2.10	0.66	3.39	0.66	6.70	-
類型	-							

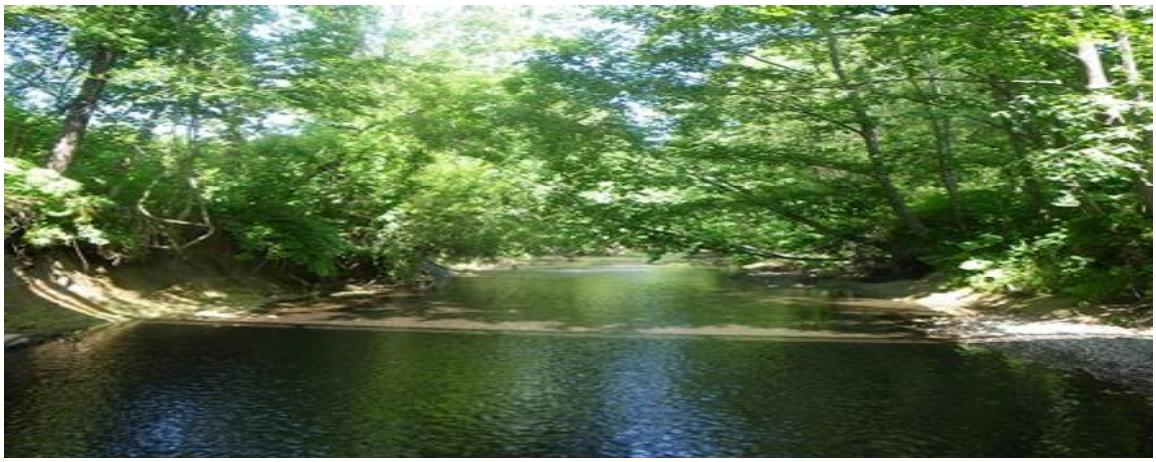
平成３０年度～令和６年度の平均値

項目（単位） ＼ 調査地点			H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
分析項目	河川に関する生活環境項目	水素イオン濃度(pH)	7.5	7.6	7.6	7.5	7.5	7.5	7.8
		生物化学的酸素要求量(BOD)	1.8	2.5	4.7	4.6	5.9	5.4	15.0
		浮遊物質量(SS) (mg/L)	8	8	6	6	18	6	6
		溶存酸素量(DO) (mg/L)	11.2	10.9	11.9	11.0	11.6	10.9	10.9
		大腸菌数※ (CFU/100mL)	58,000	1,600	2,000	4,500	40,000	11,000	39,000
	その他の項目	全窒素 (mg/L)	8.1	3.6	4.1	4.7	6.2	4.5	9.5
		全燐 (mg/L)	0.82	0.180	0.190	0.270	0.200	0.420	0.660
		硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 (mg/L)	2.1	1.6	2.1	2.9	3.1	3.2	4.0
		アンモニア性窒素 (mg/L)	5.00	1.60	1.70	1.20	1.80	0.60	3.39

※令和3年度までの調査項目は『大腸菌群数(MPN/100mL)』、河川環境基準は1,000以下である。

●測定結果

・pH、及びSSは全調査時に環境基準(河川A類型)を満たしている
・BOD及び大腸菌数は全調査日で環境基準を超過したほか、全調査日でアンモニア性窒素が他地点よりも高値であったことは、流域環境を考慮すると、糞尿等の直接流入による汚濁影響を示唆するものである
・加えて3月はSSも高く、融雪の影響による土砂等の流入影響が考えられる



ハギノ川（高谷橋）

調査地点	ハギノ川（高谷橋）							
採水年月日	R6.7.23	R6.9.25	R6.12.9	R7.3.5	平均値（BODは75%値、大腸菌数は90%値）	最小値	最大値	河川環境基準（A類型）
採水時刻	8:32	8:30	9:17	8:49				
天候	晴れ	曇り	晴れ	曇り				
気温 (℃)	29.1	19.2	-0.3	-6.6				
水温 (℃)	24.3	15.4	-0.3	-0.5				
水素イオン濃度(pH)	8.2	8.1	7.8	7.7	8.0	7.7	8.2	6.5～8.5
生物化学的酸素要求量(BOD) (mg/L)	0.9	0.5	0.5未満	0.5未満	0.5	0.5未満	0.9	2 以下
浮遊物質量(SS) (mg/L)	3	8	1未満	1	4	1未満	8	25 以下
溶存酸素量(DO) (mg/L)	9.5	12.0	15.3	14.3	12.8	9.5	15.3	7.5 以上
大腸菌数※ (CFU/100mL)	130	62	8	4	130	4	130	300以下
全窒素 (mg/L)	0.39	0.94	1.6	1.3	1.1	0.39	1.6	-
全燐 (mg/L)	0.059	0.040	0.017	0.027	0.036	0.017	0.059	-
硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 (mg/L)	0.15	0.68	1.6	1.1	0.9	0.15	1.6	-
アンモニア性窒素 (mg/L)	0.05未満	0.05未満	0.05未満	0.05未満	0.05	0.05未満	0.05未満	-
類型	-							

平成３０年度～令和６年度の平均値

項目（単位） ＼ 調査地点			H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
分析項目	河川に関する生活環境項目	水素イオン濃度(pH)	7.5	7.6	7.6	7.6	7.5	7.9	8.0
		生物化学的酸素要求量(BOD)	0.5未満	0.5未満	0.9	0.5	0.5	0.5未満	0.5
		浮遊物質量(SS) (mg/L)	2	2	4	8	6	10	4
		溶存酸素量(DO) (mg/L)	12.2	12.0	12.2	12.0	12.1	11.9	12.8
		大腸菌数※ (CFU/100mL)	770	640	950	2,400	740	120	130
	その他の項目	全窒素 (mg/L)	3.0	1.9	2.2	3.0	3.9	2.0	1.1
		全燐 (mg/L)	0.02	0.029	0.037	0.041	0.055	0.037	0.036
		硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 (mg/L)	2.8	1.7	2.0	2.7	3.4	1.9	0.9
		アンモニア性窒素 (mg/L)	0.05	0.06	0.10	0.08	0.21	0.05	0.05

※令和3年度までの調査項目は『大腸菌群数(MPN/100mL)』、河川環境基準は1,000以下である。

●測定結果

・pH、BOD、SS、DO及び大腸菌数が全調査時において環境基準(河川A類型)を満たしている
・DO以外の数値は調査期間中の変化が小さく安定している
・DOの変動については、他地点と同様に水温に依存したものと考えられる

士幌川（旭橋）

調査地点	士幌川（旭橋）							
採水年月日	R6.7.23	R6.9.25	R6.12.9	R7.3.5	平均値（BODは75%値、大腸菌数は90%値）	最小値	最大値	河川環境基準（A類型）
採水時刻	10:51	11:40	12:24	11:23				
天候	晴れ	曇り	晴れ	曇り				
気温 (℃)	32.9	19.6	1.3	-3.9				
水温 (℃)	23.6	15.9	2.3	0.1				
水素イオン濃度(pH)	8.0	8.3	7.9	7.9	8.0	7.9	8.3	6.5～8.5
生物化学的酸素要求量(BOD (mg/L)	0.8	0.5未満	0.6	0.8	0.8	0.5未満	0.8	2 以下
大腸菌数※ (CFU/100mL)	340	84	12	36	340	12	340	300以下
類型	-							

平成３０年度～令和６年度の平均値

項目（単位） ＼ 調査地点		H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
分析項目	水素イオン濃度(pH)	7.7	7.7	7.8	7.7	7.5	7.8	8.0
	生物化学的酸素要求量(BOD)	0.7	0.6	0.5未満	0.7	0.8	0.6	0.8
	大腸菌数※ (CFU/100ml)	5,300	7,600	19,000	3,600	1,400	340	340

※令和3年度までの調査項目は『大腸菌群数(MPN/100mL)』、河川環境基準は1,000以下である。

●測定結果

・pHとBODは環境基準(河川A類型)を満たし、経時変化は小さく安定している
・大腸菌数は７月に環境基準(河川A類型)を超過したがBODに高値傾向はなく、有機物や糞尿の流入の影響とは考えにくいため、過年度と同様に上流の樋門排出水の影響と考えられる

音更川（十勝新橋）

調査地点	音更川（十勝新橋）							
採水年月日	R6.7.23	R6.9.25	R6.12.9	R7.3.5	平均値（BODは75%値、大腸菌数は90%値）	最小値	最大値	河川環境基準（A類型）
採水時刻	11:09	12:09	12:46	11:39				
天候	晴れ	曇り	晴れ	曇り				
気温 (℃)	32.9	20.2	1.9	-3.3				
水温 (℃)	22.9	16.1	2.8	1.0				
水素イオン濃度(pH)	8.2	8.7	8.0	8.0	8.2	8.0	8.7	6.5～8.5
生物化学的酸素要求量(BOD (mg/L)	0.8	0.8	0.5未満	0.5	0.8	0.5未満	0.8	2 以下
大腸菌数※ (CFU/100mL)	40	26	2	2	40	2	40	300以下
類型	-							

平成３０年度～令和６年度の平均値

項目（単位） ＼ 調査地点		H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
分析項目	水素イオン濃度(pH)	8.0	7.9	8.3	8.6	7.8	8.1	8.2
	生物化学的酸素要求量(BOD)	0.5未満	0.6	0.7	1.3	0.5未満	0.5未満	0.8
	大腸菌数※ (CFU/100ml)	3,400	3,800	1,300	4,600	300	50	40

※令和3年度までの調査項目は『大腸菌群数(MPN/100mL)』、河川環境基準は1,000以下である。

●測定結果

・BOD及び大腸菌数が全調査時に環境基準(河川A類型)を満たしている
・pHは9月に環境基準(河川A類型)を超過したが、藻類の光合成の影響によるものと考えられる

資　　料

1　pH

pH とは、水溶液中の水素イオン〔H^+〕のモル濃度の逆数の対数を言う。

すなわち pH＝log1/〔H^+〕＝－log〔H^+〕

pH 値は 0～14 までの間にあり、中性とは 7.0 前後、酸性とは 7.0 以下、アルカリ性とは 7.0 以上の pH 値をいう。

通常日本の河川の pH は、7.0 前後の中性付近にあるが、次の様な因子によって変化する。

（1）地質因子…水が通ってくる地質によって変化する。塩基性の地質であれば pH がアルカリ性に傾き、酸性の地質であれば pH が酸性に傾く。

（2）土壌中の炭酸ガスの溶解による影響…地下水などの様に水が大気とあまり接触しない水では、pH が酸性になっていることがある。これは土壌中での生物作用によって発生した炭酸ガスが水に溶け込んで pH を小さくしているのである。

（3）植物の炭酸同化作用及びバクテリアによる生物体の分解…夏季の停滞期の湖沼に多くみられる現象であるが、上層付近の pH が高く、下層が低いことがある。これは上層付近では植物プランクトンの炭酸同化作用によって炭酸が失われ、水は塩基性に傾く、又、下層では太陽光線の不足のため炭酸同化作用が行われず、逆にプランクトン等の遺骸がバクテリアによって分解され、炭酸ガスや有機酸を生ずるために酸性に傾くのである。

※魚類に与える影響としては通常 pH6.5～8.5 位が良いとされている。この範囲を超えると、栄養塩の多くは結合し始め、植物に摂取され難くなり、飼料生物の生産性は低下し、ひいては魚類が生息しにくくなると考えられる。また、異常な酸性あるいはアルカリ性を示す排水は急性毒として作用し、魚類を死に到らしめる。

2　BOD（生物化学的酸素要求量）

これは水中の好気性微生物の増殖あるいは呼吸作用によって消費される酸素量のことで、一般的には一定期間（5 日間)、一定温度（20℃）で密閉容器中に保った場合の溶存酸素の減少量で示される。すなわち BOD の内容を要約すれば、天然汚水によくみられるバクテリアの種類が存在し、それが好気性で pH、温度および栄養物質などがバクテリアの生育に適当な条件にある時、採取された試料中の有機物がどの程度酸化を受け酸素を消費するかを示すものである。

更に簡略にいうならば、「試料中の生物化学的に分解される有機物量の一つの目安」ということになる。

すなわち BOD が高いということは有機物量が多いことを示している。

魚類に与える影響としては貧腐水性の水産生物のうちでも渓流等の清水域に生息するイワナ、ヤマメ等については BOD 2ppm 以下、アユ、サケ等の中流域に生息しまたは産卵するものについては 3ppm 以下が、中腐水性の水域に生息するコイ、フナ等については 5ppm 以下である事が必要とされている。

３　COD_{Mn}（化学的酸素要求量）

これは一定の強力な酸化剤（ここでは過マンガン酸カリウム）を用いて一定の条件で試料水中の被酸化物質を処理した場合に消費される酸化剤の量を求め、それに対応する酸素の量に換算して被酸化物質がどのくらいあるかを示したものである。

被酸化物質としては、各種の有機物、亜硝酸塩、鉄塩（2 価)、硫化物などである。一般的には有機物が主要を占める。COD の内容を簡略にいうならば、試料中の化学的に分解される被酸化物質の量ということになる。

すなわち COD が高いということは無機、有機汚濁量が多いということを示している。

４　SS（懸濁物質）

これは試料水を一定のろ過材を用いてろ過した場合にろ過材に残留する物質をいい、通常105℃～110℃で 2 時間乾燥した後の重量で表す。SS は河川においては主として粘土、砂などの無機物が多い（河川改修や土木工事に伴う SS 分の大部分がこれらのものと考えられる)。SS は水の外見上の‘きれいさ’を決める最大の因子の一つでその量を知ることは重要であるが、一般の河川ではその量は少なく正確な定量は難しいことが多い。

魚類に対しては一般的に 25ppm 以下であれば正常な生育環境が維持され、50ppm 以下であれば魚類の斃死等の被害の発生は防止できるとされている。

５　DO（溶存酸素）

これは水中に溶解している遊離の酸素をいう。河川水の通常の状態は大気に常に接しており、酸素ガスも十分とけ込み（通常溶存酸素は 7.5mg/ l 以上)、有機物も少なくいわゆるきれいな水であるが、それに都市下水や産業排水が加わると水が汚くなる。しかし、それも河川が流れるにつれて自然条件で沈澱や付着や酸化反応が起こって有機物が減少してゆき、水がきれいになる。この様な現象を総括して自然浄化作用（自浄作用）と呼んでいる。この中での酸化反応に消費されるのが溶存酸素である。であるから有機性の汚濁等が多くなると溶存酸素は多く消費され低い値となる。又、河川の自浄作用を超える汚濁が流入した場合は溶存酸素が欠乏し嫌気性状態になり、最後にはメタンガスや硫化水素ガス等が発生し、『死の川』になってしまう。水産利用面からすると、サケ、マス等の孵化の際の環境条件としては DO7.0mg/ l 以上が適当とされている。その他一般の水産生物の生育には 5.0mg/ l 以上とされている。又、DO の値は水温とは負の相関関係にあり、純水中では、0℃で 14.2mg/ l 、10℃で 10.9mg/ l 、20℃で 8.8mg/ l を示す。すなわち水温が低いと高い値になり、逆に水温が高いと低い値となる。

６　大腸菌数

一般に水中には、本来水生のもの、土壌由来のもの、下水由来のものなど多種多様の細菌が生息している。その中で大腸菌は本来腸内に生息する細菌で、病原菌ではない。しかし、水中に大腸菌が存在することは、その水がし尿によって汚染されている可能性が大きく、より有害な病原

菌の存在も予想される。それで病原菌を直接培養するかわりに、より簡便、かつ安全な大腸菌の試験が行われる。

7　窒素

窒素の存在形態は様々で、有機態窒素、アンモニア態窒素、亜硝酸態窒素、硝酸態窒素がある。環境中では有機態窒素や糞尿等の窒素がアンモニアに変わり、これが酸化されて亜硝酸態窒素、さらに硝酸態窒素が生成される。

また、窒素の供給源として畑地における肥料なども考えられる。

8　アンモニア性窒素

自然界に存在するアンモニア性窒素は、有機物が腐敗・分解する初期の段階で発生し、同時に発生する二酸化炭素（CO_2）と結合し、炭酸アンモニウム〔$(NH_4)_2CO_3$〕として存在することが多い。この物質は更にアンモニウムイオン（NH_4^+）、水酸化アンモニウム（NH_4OH）、アンモニア（NH_3）などの形で表流水中に存在している。尿中の尿素もアンモニアに変化する。アンモニア性窒素の存在は発生の起源からみて、比較的近い時点でのし尿汚染の発生を示唆している。

浅層地下水中には、腐植土や肥料・し尿などによるアンモニア性窒素が検出されることもあるが、多くは地下への移行中に微生物によって酸化され、硝酸塩に変化している。深井戸や貯水池の底層の水からは、硝酸性窒素の還元によってアンモニアが高濃度で検出されることもある。

9　硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素

硝酸性窒素は、あらゆる場所の土壌、水、野菜を含む植物中に広く存在している。亜硝酸性窒素は、硝酸性窒素より一般に非常に低濃度であるが、かなり広く存在している。

水中の硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素の由来は、無機肥料の使用、腐敗した動植物、生活排水、畜産排水、下水汚泥の陸上処分、工場排水、塵芥の残差等である。これらに含まれる窒素化合物は、水や土壌中で化学的・微生物学的に酸化及び還元を受け、アンモニア性窒素、亜硝酸性窒素、硝酸性窒素となる。

10　りん

天然としては岩石中のP_2O_5や動植物体の分解によって生じるものがあるが、近年問題となっているのは、合成洗剤に含まれるトリポリリン酸塩やし尿処理水によるもの、あるいは窒素と同様に肥料に含まれるものなどである。

全窒素と全りんは湖沼について環境基準が設定されている。十勝管内では糠平ダム湖と然別湖の該当類型がⅡである。

音更町公害防止条例（抜粋）

第５章　公害対策審議会

(審議会の設置等)

第３７条　町の公害対策に関する事項を調査審議するため、音更町公害対策審議会(以下「審議会」という。)を置く。

２　審議会は、町長の諮問に応じ、公害対策に関する重要な事項を調査審議する。

３　審議会は、公害対策に関し必要と認める事項を町長に建議することができる。

(組織)

第３８条　審議会は、委員１０人以内をもって組織する。

２　委員は学識経験のある者のうちから、町長が任命する。

３　委員の任期は、２年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

４　委員は、再任することができる。

(会長及び副会長)

第３９条　審議会に会長及び副会長を置く。

２　会長及び副会長は、委員が互選する。

３　会長は、審議会を代表し、会務を総理する。

４　副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。

(会議)

第４０条　審議会の会議は、会長が招集する。

２　審議会は、委員の過半数が出席しなければ会議を開くことができない。

３　会議の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

(部会)

第４１条　審議会に、必要に応じ、部会を置くことができる。

２　部会は、会長の指名する委員をもつて組織する。

(専門委員)

第４２条　審議会に、専門の事項を調査させるため必要があるときは、専門委員を置くことができる。

２　専門委員は学識経験のある者のうちから町長が任命する。

３　専門委員は、当該事項の調査が終了したときは、解任されるものとする。

音更町公害対策審議会委員名簿

任　期	自　令和７年７月１日 至　令和９年６月３０日

氏　　名	委嘱回数	区分／所属・団体等	備　　考
石井（いしい）　洋（ひろし）	5	帯広大谷短期大学生活科学科准教授	
高橋（たかはし）　勇雄（いさお）	5	クリーンタウン音更の会　会長	
長谷川（はせがわ）　充（みつる）	1	音更町校長会　副会長（下音更小学校長）	
田中（たなか）　一夫（かずお）	2	音更町消費者協会　事務局長	
藤川（ふじかわ）　篤（あつし）	1	音更町農業協同組合　筆頭理事	
目黒（めぐろ）　進（すすむ）	5	音更町交通安全協会　副会長	
米谷（よねや）　真一（しんいち）	1	音更町商工会　青年部長	
棚橋（たなはし）　紀子（のりこ）	1	木野農業協同組合　女性部副部長	
裏南（うらみなみ）　敦（あつし）	1	公募委員（行政書士）	

（敬称略）